〔新宮城の歴史〕

慶長５年(1600)、関が原の合戦後、紀伊国に入国した浅野幸長に従って新宮には浅野忠吉が入った。忠吉は、入部後すぐ築城に着手したようである。

元和元年(1615) の一国一城令で、一旦は廃城となるが、南の要の城として再建を許可され、同４年(1618)、忠吉は再び築城に着手する。

元和５年(1619)、浅野氏にかわり、徳川頼宣が紀州に入国し、付家老として新宮に水野重仲が入る。重仲は築城工事を継続し、寛永 10 年(1633)、２代城主重良の時に城は完成した。正保年間の製作である「紀伊国新宮城之図」には、本丸を中心に、鐘ノ丸、松ノ丸、二ノ丸などが配され、現在とほぼ同様の形状が確認できる。古い絵図等には天守閣、櫓、門、土塀も描かれているが、明治維新後の取り壊しにより全て失われてしまった。

現在は、幾度もの地震等災害を乗り越えてきた石垣が、往時を偲ぶ貴重な遺構となっている。

城跡は、明治以降長く民間の所有であったが、昭和 50 年代半ばに市有地となり丹鶴城公園として市民の憩いの場となっている。平成 6 年、熊野川に面した水ノ手に防災道路計画が持ち上がり事前の発掘調査を行ったところ､「炭納屋」と想定される多数の建物跡が発掘された。熊野川流域の新宮炭（備長炭）の専売をしていた新宮城主が、軍事施設である城を江戸時代の安定期に経済的施設に変えていったことを示す発見として、当時多くの関心が集まった。道路計画は中止されるとともに、近世城郭の機能としては異質の経済的側面の強い遺構が確認されたことは、近世幕藩体制化の領主権力の経済的基盤を考える上で重要な発見であるとして、平成 15 年 8 月国の史跡指定をうけた。

平成 6 年に発掘された炭納屋跡